

# 經濟論叢

第125卷 第5号

---

- 比較生産費説・国際価値論・貿易利潤(下)……本 山 美 彦 1
- 労働市場における差別(2)……………協 坂 明 28
- 社会主義的合理化論の現代的課題と方法……………陶 山 計 介 43
- チェーンストアとその特別課税問題……………三 浦 一 郎 63
- 

昭和55年5月

京 都 大 学 經 濟 學 會

# 社会主義的合理化論の現代的課題と方法

——エルマンスキー・理論の意義と限界——

陶 山 計 介

## はじめに——1920年代ソ連における「合理化」論の展開——

「科学的管理法」＝テイラー・システムについて前稿では、オ・ア・エルマンスキー（O. A. Ерманский, 1866年—1941年）の所説を検討しながら、資本主義企業管理批判の視角＝“効率——人格——民主主義”と方法論的枠組み＝“経済——技術・労働・管理”を提起した<sup>1)</sup>。とはいえそこでは資本主義企業管理批判の基準が示されたにすぎず、それにしたがった社会主義企業管理のあり方については言及されなかった。またエルマンスキーの評価としても、従来、等閑視されておりしかも正当にとりあげるべきと考えられる諸点をもっぱら提示され、その問題点は必ずしも十分には論じられてはいない。

本稿での課題は1920年代、ソ連においてはやくから社会主義企業管理の「合理化」問題を提起した同じエルマンスキーの「社会主義的合理化」論をとりあげ、前稿での視角と枠組みの観点よりの考察を通じてその意義と限界を明らかにすることである。それは社会主義企業管理における“効率と民主主義”問題解明の1つの糸口と思われる「現代社会主義合理化」分析の準備作業にほかならない。

ここではエルマンスキー「合理化」論そのものの検討に進むに先立って、その歴史・理論的背景である1920年代の「節約・合理化運動」と社会主義的合理化論の展開を概観し、その基本的内容、理論の特徴をあらかじめ示しておこう。

1) 拙稿『「科学的管理」批判と効率・人格・民主主義』『経済論叢』第124巻第1・2号、1979年7・8月。

1921年3月、10回党大会によってネップが導入され、ソ連は急速な経済復興と社会主義の土台の建設に着手していった。その後、復興過程の基本的な終了とともに国民経済の社会主義的改造をめざして1925年12月、14回党大会で社会主義的工業化の方針が提起された。それは商品飢饉・インフレ現象と労農同盟の危機というかたちで噴出した基本建設資金や工業基幹要員の不足などの技術的・経済的立ち遅れを社会主義の「内部的可能性」に依拠しながら克服しようとするものであった。この工業化路線のもとで具体的にはきびしい節約政策と生産・労働の組織・技術的改良＝「合理化」を通じた労働生産性向上、工業製品の原価引下げを内容とする「節約・合理化運動」がとりわけ1926—27年にかけて展開されていった<sup>2)</sup>。

それはタイラー・システムやフォード・システムなどアメリカを中心とする経営管理論、ドイツにおける産業合理化運動にたいする批判ないし批判的撰取の動きを背景としている。またその展開にあたってはレーニンの次の2つの命題が念頭におかれていた。それは、「社会主義を実現する可能性は、われわれが、ソヴェト権力とソヴェト的管理組織とを、資本主義の最新の成果とむすびつけることに成功するかどうかによってこそ、きまる」という規定、「科学と資本主義の技術の最新の成果を、大規模な社会主義生産をつくりだしつつある、自覚した労働者の大衆的団結にむすびつけている新しい労働組織」・「高度の型の社会的労働組織」の創出という規定<sup>3)</sup>である。この意味で1920年代における一連の「生産と労働の組織化」は、「社会主義的合理化」運動として展開されようとしたといえよう<sup>4)</sup>。

社会主義的合理化の定義についてミリューチンは、それを「現存の物質的手

2) *История Коммунистической Партии Советского Союза*, М., 1962, стр. 400—403, И. М. Бурдянский, *Против механицизма в рационализации*, «Проблемы экономики» 1930, № 3, стр. 119. 上島武『ソビエト経済史序説』1977年, 130—137ページ。

3) В. И. Ленин, *Полн. собр. соч.*, том. 36, стр. 190, том. 39, стр. 13, 17, 邦訳『レーニン全集』第27巻, 261ページ, 第29巻, 423—424ページ, 427ページ。

4) См. КПСС в резолюциях съездов, конференции и пленумов ЦК, том 3, М., 1970, стр. 454.

段のもとでより大なる生産効率と労働・労働者の状態の改善をもたらす労働と技術の様式の改良に関する方策の計画的体系」と規定し、「社会主義建設の不可分の部分」とみなしている<sup>5)</sup>。1927年3月の党中央委員会総会決議「生産合理化の諸問題」では、社会主義的合理化の目的が「労働者階級の人数の増加、その物質的・文化的水準の向上、広範な労働者大衆の増大する欲求の充足、労働者と農民のスミイチカ(СМЫЧКА)の強化、国の社会主義的要素の一層の発展の物質的土台の創出」におかれた<sup>6)</sup>。社会主義的合理化の内容については、「生産の技術・組織上の改良の3方向」として、①最新の科学・技術に立脚する新規企業の創設、②現存企業の抜本的な設備更新、③現存設備の最大限利用と生産の再編成があげられる<sup>7)</sup>。またそれは2つの主要部分からなる。第1は、技術的合理化(РАЦИОНАЛИЗАЦИЯ ТЕХНИКИ)で、生産の機械化、標準化、類型化、連続流れ作業生産、企業の専門化などが含まれ、第2は、科学的労働組織(НАУЧНАЯ ОРГАНИЗАЦИЯ ТРУДА; НОТ)で、労働の合理化を通じた労働力の向上、労働条件の改善、労働日の短縮、実質賃金の上昇、労働者や技師・技術者カードルのイニシアチブの發揮などである<sup>8)</sup>。具体的方策としては生産過程の技術・組織面の研究、労働者大衆の直接的参加と専門家の利用、勤労者の技術習得のための措置(宣伝・普及、生産協議会での実践経験、教育)が指摘されている<sup>9)</sup>。

みられるようにここには新投資を伴う技術的改造や管理機構の官僚主義(büroкратизм)との闘争、勤労者の参加など冒頭にみたレーニンの「新しい高度な社会的労働組織」の諸契機への言及がなされ、その限りで「社会主義的合理化」論としての特徴をもっている。しかしその主要な理論的傾向をみると、さきのミリュエチンの「合理化」の定義にも示されるように、「合理化」の重点

5) В. П. Милютин, *Капиталистическая рационализация и рационализация социалистическая*, М., 1930, стр. 12.

6) *КПСС в резолюциях...*, том 3, стр. 455-456.

7) Там же, стр. 456.

8) В. П. Милютин, *Указ. соч.*, стр. 27-31, *КПСС в резолюциях...*, том 3, стр. 457-458.

9) В. П. Милютин, *Указ. соч.*, стр. 41-46.

はむしろ現存の労働・生産過程の合理的組織化による高い労働生産性の達成におかれていたように思われる。「設備のより完全な利用、労働者の技能の向上、工場企業の組織改善、労働日の稠密化、労働規律の強化、欠勤との闘争」が強調された<sup>10)</sup>。さらに労働生産性の向上を刺激する賃金体系が導入され、管理組織面では管理諸機能の専門化、計画の意義、権限——義務関係の明確化、上級機関の指導の必要性がいわれるなどそのヒエラルキー化傾向もうかがわれる<sup>11)</sup>。

## I 『合理化の理論と実際』<sup>12)</sup>の基本構成

エルマンスキーは前著『科学的労働・生産組織とテイラー・システム』(1922年)<sup>13)</sup>以降の事態の変化に注目し、「社会主義的合理化かそれとも資本主義的合理化か?」という問題を設定する。「HOTとテイラリズムとの対比」からすすんで現在では、社会主義建設のための科学的・実践的に鍛えられた知識や技術的・組織的な合理化の原理や方法を積極的に提示することが求められている<sup>14)</sup>。すなわち社会主義的合理化論の課題は、以下の4点である。第1は、「合理化問題の原則的根拠と方法論」を示すこと。ここでは、①極大と最適との区別、②労働生産性と労働強度との区別、③労働強化と生産強化との区別が中心問題となる。第2は、原材料・機械など「生産の死んだ要因」の合理化問題であり、第3は、「生きた労働力」の合理的選択・利用と労働現場の合理化。

10) 1926年4月の党中央委員会総会決議「経済状況と経済政策について」を参照。(КПСС в резолюциях..., том 8, стр. 321.)

11) たとえば1924年3月の第2回HOT会議での決議を参照。(Научная организация труда и управления, под ред. А. Н. Щербаня, М., 1965, стр. 32-34, Д. М. Беркович, Формирование науки управления производством, М., 1973, стр. 112.)

12) О. А. Ерманский, Теория и практика рационализации, Л., 1928. 独語版は, J. Eamanski, Theorie und Praxis der Rationalisierung, Wien-Berlin, 1928. またこの独語版より邦訳もなされている。東城只雄訳『合理化の理論と実際』1930年、高山洋吉訳『科学的工場組織の理論』、『科学的工場経営の実際』1938年。ここでの引用その他は基本的に原書および独語版によった。

13) О. А. Ерманский, Научная организация труда и производства и система Тейлора, М., 1922.

14) О. А. Ерманский, Теория и практика..., стр. X-XI. なお引用文中の傍点はとくにことわらない限り、原文では隔字体または斜字体。

そして第4は、工業企業の管理、計算、計画化である。なおここでは考察上、2つの限定がみられる。1つは、工業企業の合理化がもっぱら対象とされ商業、農業などの合理化は除外されていること、もう1つは、個々の企業の合理的組織化が扱われているだけで一般経済問題とりわけ地区編成(районирование)、生産諸力の配置、工業化など経済計画化の問題は度外視されていることである<sup>15)</sup>。

『合理化の理論と実際』では、さきの3つの課題のうち第1、第2の課題が主として論じられている。とはいえかれの「合理化」論の中心テーマである社会主義的合理化の原理と方法については詳細な考察がなされており、同書によってエルマンスキーの「合理化」像をうかがうことができる。

「最小の支出で最大の成果が達成される」という「力の節約(экономия сил)」が「組織原理」であるとする前著での結論<sup>16)</sup>をふまえてエルマンスキーは、社会主義的合理化の内容を、①労働の生産性の増大、②労働の強化、③生産の強化、の3側面より展開する。

(1)労働の生産性の増大。「労働の生産性は、すべての生産要因の最適な利用と相互の調和とによって最大限に増大させられ」ねばならない。生産手段は良質で適時に準備され合目的に利用されること、すなわち仕事台や機械などは所定の設備をそなえ中断や無駄な動作のないように配置され、道具も常に修理されしかるべき場所に整頓されることが必要である。また各労働者はその肉体的・精神的特性にそって配置されるよう職業選択が適正になされるとともに、自らも作業に習熟し「練習の集積(накопление упражнения)」の成果を発揮しより少ない力と緊張で有益な結果をもたらすことが求められる<sup>17)</sup>。

(2)労働の強化。労働強度は生きた生産要因の最適の利用を保障する「生理学的に正常な水準」以上に高められてはならない。その限界内での労働強化の技

15) Там же, стр. XI-XII.

16) О. А. Ерманский, *Научная организация труда* . . . , стр. 15.

17) О. А. Ерманский, *Теория и практика* . . . , стр. 131-132, 151.

術的方法は、①機械の回転数の増加などによる作業の加速化、②同一労働者の監視する機械や労働領域の拡大、③工場内運搬のベルト・コンベア方法、④不休労働の組織などである。その経済的方法としては「プレミア制度」、「利潤配分制度」など労働者にとって魅力的な賃金形態が活用される<sup>18)</sup>。

(3)生産の強化。「生産過程の強化は、空間・時間の不必要な間隔の短縮、諸力の不生産的な浪費をあらかず過程の短縮または除去により最大限に達成されねばならない。それは原材料、機械・設備、労働者、半製品などの各生産諸要因が生産過程内または各生産過程間で有機的に結合され、一つの作業連鎖が形成されることにほかならない。そのためには標準化にもとづく大量生産や流れ作業、輸送の合理化が必要である。こうして人間や機械のエネルギーの不生産的な支出が節約される<sup>19)</sup>。

以上がエルマンスキーの「労働・生産の社会主義的合理化」の基本的内容である。

## II エルマンスキー「合理化」論の歴史・理論的意義

エルマンスキーは社会主義的合理化における分業と、生産の機械化に関連して企業管理の“効率”と“人格”の問題を論じている。

まず“社会主義的合理化と効率”についてみよう。エルマンスキーは分業を労働過程の合理性の増大にとってきわめて重要な方法であり、その他の合理化方法の適用の前提条件とみなす。それは各人が労働時間内に多数の対象にたいして同一の作業をおこなうことを特徴とする。その意義は、以下の4点に求められている。第1に、労働動作の不断の反復によって「練習の集積」が達成され、その「自動化(автоматизация)」と「律動化(ритмизация)」がもたらされることを通じて不必要な筋肉グループの除去など筋肉・精神エネルギー消費の節約が可能となる。第2に、時間的・空間的分業の組合せは時間点・空間点

18) Там же, стр. 151. См. глава 4: IV-VIII.

19) Там же, стр. 148-151. См. глава 6, 9, 10, 11, 12.

の結合を促進し生産の強化をもたらす。分業は、第3に、熟練労働者の削減の可能性を与えることにより労働者の修業の低廉化と期間短縮を達成する。第4に、労働者の補充と合理的選択を容易にする<sup>20)</sup>。

こうして分業は、労働環境ないし労働条件および労働者の諸力の最良の内的組織と、両者の結合における一層合理的な利用を可能にする。その結果、エネルギー支出の増大を伴わない「労働収益性 (успешность труда)」が著しく増大することとなる。労働生産性の増大における分業の役割をエルマンスキーは高く評価し、この分業原理を、「合理化的一般的方法」としてソヴェト工業に積極的に導入することを主張したのである<sup>21)</sup>。

その際、かれは生産の機械化の意義を強調している。機械化は「機械使用による手の動作の代替」であり、労働者を荒々しく困難な筋肉の緊張から解放する。それだけでなく機械・装置はそれ自体より大きな力の源泉であり、一個のより大きな「組織合計」を生む。さらに「力の積極的選択とその相互の強め合い」をも可能にするが、それは機械の恒常性と正確さによって生産過程が人間の肉体的個性、気分などに起因する偶然性から解放されることにもとづいている。生産の機械化はこのように「力の結合の利用の最適性」を要求するとともに、それを実現するのである<sup>22)</sup>。

エルマンスキーのこの見解を、技術的・経済的な生産効率の増大についての提起にかかわらせて検討しよう。もちろん、社会主義と高度な生産力とは不可分のものである。労働生産性の向上は新しい社会制度である社会主義の勝利にとってもっとも重要なものである。また共産主義への移行は、「資本主義的労働生産性に比べてより高度の労働生産性」の達成によって実現される<sup>23)</sup>。反対に生産手段の私的所有を廃止し無政府性を基本的に克服した社会主義のもと

20) Там же, стр. 236-239.

21) Там же, стр. 136-137.

22) Там же, стр. 252-253.

23) В. И. Ленин, *Полн. собр. соч.*, том 39, стр. 21, 邦訳, 第29巻, 431—432ページ。Vgl. *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 19, S. 21, 邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』第19巻, 21ページ。



で、はじめて労働生産性の向上は全面的かつ言葉の本来の意味において追求され、また達成されるのである。

経済的・社会的な後進国であったソ連においてとくにこの労働生産性の向上、生産効率の増大が緊急かつ不可欠の課題であったことは疑いない<sup>24)</sup>。しかし問題は、それが社会主義的合理化ないし「労働・生産の科学的組織化」と密接不可分のものとして追求されるかどうかということにあると思われる。この点についてエルマンスキーは、ソ連における経済政策と工業政策は転換されねばならないと次のようにのべる。「戦時共産主義」期、復興期にとられていた「非常手段」を通じた労働強化は二側面から変更を余儀なくされている。一方で、この方法を長期にわたってとることは労働者の健康破壊、労働災害の増加、製品の品質の低下、労働者の作業能力の低下をまねくことによって不可能となる。他方、ソ連が内外の困難を克服して社会主義を建設していくためには工業生産を根本的に高め、生産費を引下げることが不可欠であり、これら両面から政策の重点を労働強化より生産の合理化へと移すことが求められている<sup>25)</sup>、と。

「節約・合理化運動」の展開は、さきにみたように社会主義的工業化路線と密接に関連していた。そしてこの工業化方針は、「社会主義の物質的・技術的基盤」の創出を目標とするものであった。したがって、工業化路線のもとでの「合理化」は、生産の技術的基礎の改造をその内部にふくむか、あるいは本格的な技術的改造の展開に組織構造の面で接続しうのような労働・生産組織の改善＝再編成でなければならなかったといえる。労働生産性の向上、生産効率の増大も、労働・生産組織の分業原理にもとづく編成が「労働の連続性や一様性

24) 復興期におけるセンサス工業の労働生産性の推移をみると右表のように、1925年で戦前水準をほぼ回復したにすぎない（出所：П. И. Лященко, *История народного хозяйства СССР*, том. III, М., 1956, стр. 165. の表より作成）。

25) О. А. Ерманский, *Теория и практика...*, стр. 170-172.

	労働者1人当り生産高 (1927/28年価格 グループ)	指数
1913年	3,955	100
1920年	—	—
1921年	1,544	39
1922年	2,184	55
1923年	2,706	68
1924年	2,744	69
1925年	3,652	92

や規則性や秩序」ないし「社会的労働過程の質的な編制とともに量的な基準と均衡」<sup>26)</sup>をもたらす結果として達成することが求められていたのである。その意味でエルマンスキーが、「労働強化は合理的組織の敵である」という資本主義的合理化批判<sup>27)</sup>をふまえて、労働者への圧迫や質の低下などをまねく従来の労働・生産組織を「非効率」性において批判し、それにかえて「企業の全生産過程の科学的組織化」を主張したことは妥当性をもってしよう。それはさきのレーニンの規定を「効率」の面から具体化・展開しようとした試みであった。

また、エルマンスキーのこの主張は、当時の諸「合理化」論において、労働強化を労働生産性向上の要因とみなし「適度の」労働強化をふくむ生きた労働そのものの生産性向上がとくに強調され、「節約・合理化運動」が実際には「労働者への有形・無形の圧力」を伴うものとならざるをえなかったこと<sup>28)</sup>を考えると、高く評価されてよい。さらに、かれが労働・生産組織の改善にあたって生産の機械化を「根本的方法・課題」とみなし、「合理化」と技術発展との関連に注目している点は、機械・設備など技術的諸条件を所与のものとし機械化・電化といった労働手段の変革＝技術進歩と、HOTにおけるその意義を理論的にも過小評価していく当時の傾向<sup>29)</sup>と対比してすぐれているといえる。

同時にエルマンスキーは、社会主義的工業化の最終的目標である「国内の社会主義的生産関係の発展・強化」の中心課題をなし、さきのレーニンの規定のもう1つの要素でもある「勤労者自身の自由で自覚した規律」の形成を、“社会主義的合理化と人格”の問題として論じている。

26) *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 23, S. 366, 邦訳, 第23巻 a, 453-454ページ。

27) 資本主義的合理化を労働強化＝搾取強化の点で批判する当時の労働者階級の規定を、エルマンスキーは合理的組織との関連で論じたのである。たとえば1929年のコミンテルン執行委第10回総会でのクーン報告 (O. V. Куусинен, *Избранные Произведения*, М., 1966, стр. 116-120.) 参照。

28) И. М. Бурдянский, *Указ. соч.*, стр. 105, 115, Е. Н. Кар, 南塚信吾訳『一国社会主義——経済——』1977年, 299-322ページ, 上島武, 前掲書, 137-139ページ。

29) В. П. Мильютин, *Указ. соч.*, стр. 26, *Научная организация труда и управления*, *Указ. соч.*, стр. 32, И. Бурдянский, *Рационализация и техника (доклад и прения)*, «Проблемы экономики» 1929, № 7/8, стр. 192-193.

かれは分業の極度の進行について警告を発する。分業は「専門化」傾向をもち、「人間の活動領域をはなはだしく制限し労働者の非人格化(обезличение)を促進する。」<sup>30)</sup> 実際、資本主義諸国では対抗手段がとられないので労働者の健康と精神的発達が阻害されている。しかし、この弊害は社会主義的合理化においては、次の二様の仕方でも克服されるし、また克服されねばならない。

第1に、それは生産の機械化または技術発展そのものによって克服される。生産の機械化は、「労働を機械的で、単調にして退屈な、頭脳を麻痺させる動作に変え」るのではなく、反対にそうした有害な作用にたいする一定の「解毒剤(противоядие)」を提供する。いいかえると「技術は専門化とならなでますます著しい程度で脱専門化(деспециализация)という反対傾向をおしすすめる」のである<sup>31)</sup>。それは三局面にあらわれる。1つは、労働者が複雑な機械体系の監視、制御、調整をおこなう技師や技術者に転化すること。機械化とりわけ自動機械の導入は、人間の手作業、細分化され専門化された労働動作をもはや不要とする。労働者は自動機械の運行をコントロールするだけである。その例は近代的な製粉工場や発電所である<sup>32)</sup>。もう1つは、「種々の条件のもとで種々の機械を動かすような『労働者』タイプが形成される」こと。「今日は自動車の運転手かと思えば、明日は汽船の機関士になる」、「発電所で働いたあと飛行機を操縦する」というように、労働者の労働は脱専門化される<sup>33)</sup>。いま1つは、流れ作業組織にもとづく大量生産方式を通じた労働の共同的性格(коллективность)の強まり。職場別構造において各労働者は孤立して作業しており全体との結びつきは自覚されなかったが、流れ作業においては各労働者が相互に緊密に結びつき、一個の集団(коллектив)を形成する。眼前で相互に関連する種々の労働を見るかれらは、自己を全体または集団の一構成部分と理解するようになる。それらの部分諸機能は1つの連鎖の有機的な諸環となっている<sup>34)</sup>。

30) О. А. Ерманский, *Теория и практика . . .*, стр. 241.

31) Там же, стр. 241, 252.

32) Там же, стр. 241-242.

33) Там же, стр. 242.

第2は、分業の弊害にたいする「意識的・社会的な反作用（противодействие）」である。社会主義・共産主義社会は、第1の傾向を全面的に推進するとともに、狭隘な専門化の有害な結果を計画的に克服する多くの手段を保障する。とりわけ、「労働日の短縮、諸種の社会活動（文化、政治、経済など）への社会の各成員の参加、体育の高度に発達したシステム、芸術的創造」などがそれに属する<sup>35)</sup>。こうして「非人格化」ではなく「労働の喜び（Arbeitsfreude）」が生まれることになる<sup>36)</sup>。

社会主義社会は、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような1つの協同社会」ないしそれを実現していく社会である。したがってそこでは、各社会成員の「肉体的および精神的素質が完全に自由に伸ばされ発揮されるように保障する生活を、社会的生産によって確保する可能性」を現実化することが求められる<sup>37)</sup>。

とりわけ、社会主義を物質的＝生産的に導入する準備の程度においておくれたソ連では、勤労者の低い「文化・技術水準」の引上げ、勤労者の人格性——文化性と管理能力・統治能力——の向上は必須の課題であった<sup>38)</sup>。レーニンの「自由で自覚した労働者の大衆的団結」に支えられた「新しい高度な社会的労働組織」もそれを不可欠の前提としている。この点でエルマンスキーは当初より一定の見識を示していた。当時の社会主義的工業化路線＝「節約・合理化運動」のなかで、さきに見たかれの「合理化」論には、労働生産性の向上な

34) Там же, стр. 404-405. 他方でエルマンスキーは、資本主義的コンベア・システムにおいてみられる人間労働の同種化・半調化、労働者の視野の狭隘化、過度の労働強化——総じて人格の圧迫についてはきびしく批判している。

35) Там же, стр. 245.

36) J. Ermanski, *Theorie und Praxis* . . . , S. 250.

37) *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 4, S. 482, Bd. 20, SS. 263-264, 邦訳, 第4巻, 496ページ, 第20巻, 291ページ。

38) たとえば、1920年における住民の読み書き能力についての統計では31.9%という低水準であった（В. И. Ленин, *Полн. собр. соч.*, том 45, стр. 363, 邦訳, 第33巻, 481-482ページ）。また労働者の技能・熟練水準では、復興期の終了した1926年の全連邦センサスでも、熟練労働者——53.4%, 半熟練労働者 26.3%, 不熟練労働者——20.3%という状況であった（А. А. Матюгин, *Рабочий класс СССР в годы восстановления народного хозяйства (1921—1925)*, М., 1962, стр. 239.)。

いし効率の増大というさしせまった課題・目標に制約されたかたちではあるが2つの歴史・理論的特長点がみられる。第1は、社会主義的合理化のなかでの人格化の意義についての一定の評価である。とりわけ、労働生産性の向上に「合理化」やHOTの主要な意義をおき、労働者について論ずる場合でも健康保持など労働条件の改善がもっぱらいわれていたにすぎない当時の諸「合理化」論<sup>39)</sup>のなかにあつて、社会主義では、労働そのものが最高の尺度であり最高の目的としてあらわれる、として労働者の精神的水準の向上や自発性の発揮などが強調されている点は積極的に評価されてよい<sup>40)</sup>。

第2に、その人格化の基本方向についての正当な示唆が与えられていることである。一方で、人格化は労働者の技師・技術者化、多職種兼担、労働者の協働の実現など社会主義のもとでの技術発展の必然的帰結であり、他方、その場合、労働日短縮を通じた社会活動への勤労者の参加の保障などの国家的措置がきわめて大きな役割を果たすという指摘がそれである。とくに、分業の弊害の克服の基本的方向としていわれている諸点は、社会主義社会のもとでの「旧来の分業の廃棄」の基本的モメント——①精神労働と肉体労働との本質的差異の消滅、②「労働の転換、機能の流動、労働者の全面的可動性」の実現、③部分労働と全体労働との一体化——についての先駆的な指摘といえよう<sup>41)</sup>。

以上、エルマンスキーが社会主義企業管理における“効率”と、それとの関連での“人格”の実現という課題を、あくまで示唆的にはあるがはやくから積極的に提起していたことが理解されよう。そしてその「合理化」論は、社会主義的工業化路線のもとでレーニンの「新しい高度な社会的労働組織」についての規定を一層具体化・展開したものにほかならないといえる。

39) См. *Научная организация труда и управления*, Указ. соч., стр. 29, КПСС в резолюциях..., том 3, стр. 457-458.

40) О. А. Ерманский, *Научная организация труда...*, стр. 236, 238.

41) 「社会主義と分業廃棄」の問題は別稿の課題であるが、さしあたり次を参照。中野雄策『「分業」および「分業の廃棄」について』〔I〕, 〔II〕, 〔III〕, 『山口経済学雑誌』第16巻第1号, 第18巻第2号, 第3号, 1965年9月, 1967年10月, 11月, 井手啓二「社会主義社会の性格と分業廃棄の論理」, 『中国研究』第24号, 1972年3月, 奥林康司「分業の廃棄について」(1), (2), 『国民経済学雑誌』第130巻第4号, 第5号, 1974年10月, 11月。

## III エルマンスキー「合理化」論の理論的限界

エルマンスキーが社会主義的合理化の基本課題を提起したことは前節でみたが、それを“経済——技術・労働・管理”というわれわれの方法論的枠組みの観点から立入って考察すると、そこにはかれの積極面と矛盾しかねない重要な問題点が指摘されよう。

エルマンスキーは、企業における生産の基本的任務を、「できるだけ多くの生産物の創出、できるだけ大きな労働成果の達成」におく。そこでは、1労働日当り1労働者の生産物量である「労働の収益性」の増大が合理的生産の目的とされる。「生産過程の合理的組織は、現存の生産力または生産要因間の関係を変化させることによって有益な結果を増大させるという目的をもつ。」この「達成される有益な結果の量的な増加」をもたらすために、「あらゆる種類のエネルギー」や「諸力の組合せの質的な改良ないし変更」という手段がとられるというのである<sup>42)</sup>。

この合理的組織の「指導原則」、「中心軸」が「最適性の原則 (принцип оптимума)」である。すなわち、Rを有益な結果の量または遂行された有益な労働の量 (単位はキログラム・メートル)、Eを参加した生産要因によって支出されたエネルギー量 (単位はカロリー) とすれば、それは、 $\frac{R}{E} = m$  (支出されたエネルギー1単位当りの有益な労働) の極大化、 $\frac{E}{R} = n$  (有益な労働能率、1単位当りのエネルギー支出) の極小化としてあらわされる。費用・犠牲にかまわずできるだけ多く生産すること (——Rの極大化) でもできるだけ少ないエネルギー支出で有益な結果のわずかな量に満足すること (——Eの極小化) でもない。「エネルギー利用の最良ないし最適の質を確保すること」が問題なのである。いかえると、合理的組織の原則は「極大の原則」(あるいは「極小の原則」)ではなく、「最適性の原則」にほかならない<sup>43)</sup>。

42) О. А. Ерманский, *Теория и практика ...*, стр. 1-2, 130.

43) Там же, стр. 18-21.

いうなればこの「最適性の原則」をエルマンスキーは、①最適な労働生産性と労働強度の科学的決定原則、②労働力と生産手段の組織における実際的課題の科学的解決手段、③企業の構造的組織的合理化手段、④社会主義的合理化の原則、として全展開の基軸にすえようとしているのである<sup>44)</sup>。

この合理性の「基準」と、前節で示された社会主義的合理化の諸課題とはどのように関連するのであろうか。「最適性の原則」とさきの“効率——人格”との関連はいかなるものか。実はこの点の正しい理解が、エルマンスキー「合理化」論の総体的評価、とりわけその意義と限界を確定する際の鍵をなしているのである。さしあたり、まずかれの方法論的特徴を検討してみると、そこには以前にはそれほど鮮明ではなかったいくつかの傾向がみられる。

第1は、労働・生産の主として組織・技術的側面の考察に傾斜していく傾向である。経済学は社会的諸関係、社会的生産関係の「弁証法」を観察し、マルクスも現象の「技術・経済的方面」に重点をおいていたが、われわれは「組織的な方面、生産要因の合理的利用」を強調しなければならない。いいかえると、それは労働過程のよりよい組織＝「労働の組織的生産性」を問題にする「労働過程の合理化の技術・組織理論」にほかならない<sup>45)</sup>。

第2は、そのように社会・経済的關係ときりはなされた労働・生産過程に関して独特の理解がみられること。その1は、労働・生産過程ないし生産諸力をエネルギーを通じて把握していることである。人間のエネルギーのほかモーター、機械、工場建物などいっさいの生産要因が力として理解され、その結果、労働・生産過程は機械的、化学的、生理学的など各種エネルギーで構成されるということになる。「マルクスの労働価値説をエネルギーの用語でのべる」というのである<sup>46)</sup>。その2は、特異な「生産要因の組織分析」である（第1表参照）。「労働の収益性」が労働の生産性および労働の強度という2要因に大別さ

44) この整理は、向井武文『科学的管理の基本問題』1970年、248-249ページに拠った。

45) O. A. Ерманский, *Теория и практика* . . . , стр. 124-125, 139.

46) Там же, стр. 1-2, 124.

第1表 生産要因の組織分析の図式

	生産要因	その技術的役割	その経済的役割	労働収益性のための要求	その特徴	組織的役割	
1	材 料	生産手段	不変資本	良 い 質 選択と準備 合理的利用	質的改良は エネルギーは 支出が同じ少 ない場合さ ない場合にえ においてさ より大なる 結果を生み 出す	労働の生産 性の要因	
2	労働手段						
3	労働力	労働力	可変資本	良 い 質 選択と準備 合理的利用	エネルギー の一定量の 支出		諸力の支出の 量的増加のみ がより大なる 結果をもた ず

(出所) O. A. Ерманский, *Теория и практика рационализации*. Л., 1928, стр. 134.

れ、前者の達成方法は「合理的改良」に、後者のそれは「支出されるエネルギー量の増加」にそれぞれ求められる。そして、労働生産性向上の素材的担い手としては労働条件ないし労働環境として一括された労働材料や労働手段と、さらにその側面からみた労働力があげられ、他方、労働力の他の側面は労働強度増大の担い手とされるのである<sup>47)</sup>。

このような特徴をもつ方法論にそってさきの合理性の「基準」が適用されるなら、その場合の「合理化」像は、前節でみたものとは相当に異なったものとならざるをえないし、その「合理化」論も修正を余儀なくされよう。またこの点にエルマンスキー理論の理論的限界が示される。それは以下の2点である。

第1は、「合理化」論の「生産力説」的偏向<sup>48)</sup>。「生産の合理的組織」は「有益な結果の量的な増加」という目的のための手段であることから、その質

47) Там же, стр. 130-134.

48) この点は従来よりエルマンスキー批判の中心論点の1つであった。しかし、さらにその内容に立入ってこの偏向が社会主義的合理化論として、とりわけその課題についていかなる不都合をもたらすかということについては、これまでほとんど論及されてこなかったと思われる。См. С. А. Бессонов, *Библиография*, «Проблемы экономики» 1929, № 1, стр. 165, И. М. Бурдянский, *Указ. соч.*, стр. 114, В. П. Милютин, *Указ. соч.*, стр. 11-12, Д. М. Беркович, *Указ. соч.*, стр. 110-111. またわが国のものとしては、宮田喜代蔵『経営原理』1931年, 328, 338ページ; 内海義夫『労働科学序説』1954年, 153, 171-ページなど。



の内容も結局、量の大小によって評価される。「組織・技術的合理性」は、社会主義的合理化において主に素材面での効率化の契機を構成する1要素である。しかしそれが「社会・経済的合理性」ときはなされて唯一の基準として機械的に適用されるなら、その「社会主義的合理化」は、資本主義的合理化と区別された固有の社会・経済的質と内容を十全に示すものとはいえない。また労働・生産要素の「最適な利用」を通じた「完全で科学的な組織性、あらゆることにおける計画性、高度の意味における節約」を社会主義的合理化の特徴と規定する<sup>49)</sup>ことも一面性を免れない。それは社会主義的合理化の組織・技術的側面からみられた機能上・形態上の1特徴にすぎない。それが極端におしすすめられると、「共産主義とは社会的生産における生産力の科学的組織である」という明らかに誤った主張にいきつく<sup>50)</sup>。そのことはまた、労働生産力の発展を通じて社会主義的生産諸関係の創出を含む社会主義建設の課題がいわば“自動的に”達成されると考える誤りを犯すことにもなる。そしてこの「生産力説」的偏向は、エルマンスキーの社会主義についての非歴史的・楽観的な認識に示されているように<sup>51)</sup>、それとは正反対のいわば「生産関係説」的偏向とともにメダルの両面をなしている。むしろ、資本主義的合理化批判における多分に「生産関係説」的なかれのアプローチが、その対極としての社会主義的合理化にたいする「生産力説」的偏向を生みだしたとみることもできよう<sup>52)</sup>。

第2は、「合理化」の実体的内容をなす労働・生産過程ないし生産力構造そのものの把握における「エネルギー論」的偏向および「機械論」的偏向<sup>53)</sup>。こ

49) O. A. Ерманский, *Научная организация труда...*, стр. 238. なおこれは資本主義ないし資本主義的合理化の「無政府性」、「浪費性」、「略奪性」と対比して論じられている。

50) こうした見解をもつヤロシェンコ (Л. Д. Ярошенко) がスターリンによって「ボグダーノフ主義」と批判されたのは周知のとおりである (『スターリン戦後著作集』1954年, 280ページ)。

51) O. A. Ерманский, *Научная организация труда...*, стр. 238.

52) これはかつての社会主義的合理化論にほぼ共通してみられた理論傾向である (たとえば、エム・ロズマン『資本主義的合理化と労働者階級』、朝野・野間訳『一般的危機と産業合理化』1950年, 17, 21-22, 191-192ページ)。その結果、社会主義的合理化が「社会主義的国民経済の要求、社会主義建設の発展段階によって具体的にその性格と内容がきめられる」(堀江正規「合理化」『著作集』第4巻, 1977年, 181ページ) ことが軽視される。

53) これも当初から批判の集中した論点の1つである。とはいえこの場合にも、「合理化論とりわ

のあらわれとして次の2点が指摘できる。その1は、人間の合目的的活動としての労働ないしその担い手である労働者の役割・意義の過小評価である。それは、人間と機械をエネルギー供給への依存度でのみ区別し熱エネルギーの動力エネルギーへの転換という点では両者を事実上同一視することに示される。また、肉体労働と精神労働との区別も熱カロリー量の大小に解消され、人間に固有の目的意識性が評価されなくなってしまう<sup>54)</sup>。さらに、人間の能力の発達に関連して「人格化」がいわれながら、結局それは「合理化」過程での「練習の集積」によるエネルギー支出の減少に帰着させられる<sup>55)</sup>。その2は、労働・生産過程における労働手段の意義の過小評価である。これはさきの「生産要因の組織分析」における労働対象と労働手段との一括的把握に端的に示される。この理解では労働・生産過程において労働の内容やその組織の仕方が究極的には何によって規定されるかということが不明確とならざるをえない。機械が動力エネルギーを生みだすものとのみ規定されたり、道具との相違も労働と労働対象との間に挿入される「環 (звено)」の数量に求め複雑さの増大としてしかみなされない。その結果、生産の機械化ないし技術発展の意義も主要には力の効率的で大なる創造という量的モメントにおかれることになってしまう<sup>56)</sup>。

資本主義から社会主義への移行は、社会的生産力の発展、社会成員の全面的発達の実現にむけた出発点を意味するにすぎない。したがってその全過程を通じて、「社会化された人間、結合された生産者たち」が、自然との「物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、方の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なう」<sup>57)</sup> (傍点引用者) ことが課せられる。これこそ

---

\\ その実体的構造と機能の考察における方法論的偏向のあらわれは十分に解明されているとはいえない。См. С. А. Бессонов, *Указ. соч.*, стр. 167, И. М. Бурдянский, *Указ. соч.*, стр. 105-106. また、内海義夫、前掲書、152ページ。

54) О. А. Ерманский, *Научная организация труда...*, стр. 107, 111, 118.

55) О. А. Ерманский, *Теория и практика...*, стр. 8-11.

56) Там же, стр. 252-253.

57) *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 25, S. 828, 邦訳、第25巻b, 1051ページ。

まさに社会主義的合理性の真の理論的基準にほかならない。その点でエルマンスキーが一般経済問題ときりはない工業企業内の「合理化」を論じ、そこに内容的に問題の多い合理性の「基準」を機械的に適用しようとしたことは致命的な誤りである。そこにはかれのとりあげた領域が労働組織ないし作業管理であり工場全体の管理にまで拡大されていないという課題の限定<sup>58)</sup>以上の問題性が含まれていよう。作業＝管理組織ないし企業組織の内部においてこそ社会主義的合理化の真の基準が実現されねばならない。企業の「組織・技術的合理性」は「社会・経済的合理性」によって再規定されながら、両者一体となって真の合理性を構成するのである。そしてこの認識を通じてはじめて、労働組織・企業管理の重要な編成原理である“民主主義”の、社会主義的合理化における意義と役割が明らかになる。それは新しい競争(соревнование)原理とともに共産主義社会の第1段階としての社会主義社会の歴史的な性格にもとづく社会的生産力と労働者の発達の「低水準」に規定された所有・労働・分配諸関係での「形式的平等」を克服し、「実質的平等」を実現していく手段として重視されねばならない<sup>59)</sup>。

そしてこの労働・生産過程の合理化が、その具体化にあたっては、生産力ないし生産諸要因の全面的な把握を必要とすることも理解されよう。とくに、「人間の生存の自然的条件」としての労働が示す自然支配力や潜在的能力が、社会的協働関係のなかでどのように発揮されていくか、また労働力の発達の「測度器」である労働手段体系は、「労働の技術的諸過程と社会的諸編成」にどのように作用するか、ということが問題となる<sup>60)</sup>。このような生産力の構造

58) 大島国雄「ソ連経営学」田杉・大島ほか『比較経営学』1970年、226ページ。なお大島教授の一連のエルマンスキー研究には教えられるところが大きかった。

59) この問題の立入った考察は別稿の課題であるが、さしあたり、この企業管理における“民主主義”が社会主義的合理化として“効率”および“人格”と基底においていわば相即関係にあり、後二者の結節点に位置すること、その実現にあたっては主体的契機(労働者の労働能力、管理・組織能力の発達ないし“人格”化など)と客体的契機(企業内階層制の克服と労働者の自律的協働関係の創出など)の双方の達成が不可欠であること、が指摘されよう。

60) *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 20, SS. 273-274, Bd. 23, SS. 192-195, S. 533, 邦訳、第20巻、302ページ、第23巻 a、234-236ページ、第23巻 b、661ページ。

的・機能的把握は、労働・生産過程の「エネルギー論」的・「機械論」的理解では不可能である。さらに生産力の構造にたいするさきの社会・経済的諸関係の規定性も皮相的なものとならざるをえないと思われる<sup>61)</sup>。

以上，“経済——技術・労働・管理”の構造＝機能関連の正しい把握のうえではじめて、社会主義的合理化における“効率——人格——民主主義”問題の有効な解明が可能となる。反対にエルマンスキーにあっては、その方法論的問題性——「生産力説」的・「エネルギー論」的・「機械論」的偏向のゆえにその「合理化」像も大きな歪みと偏倚を伴なわざるをえなくなったのである。

### お わ り に

社会主義的合理化についてのエルマンスキーの所説の検討を通じて、以下の諸点が明らかとなった。

第1に、エルマンスキー「合理化」論は、“効率——人格”という社会主義的合理化の基本課題についての積極的な示唆の提起と、方法論における「生産力説」的・「エネルギー論」的・「機械論」的偏向に規定された「合理化」像の歪みという両側面ととらえられねばならない。そしてこれが、エルマンスキー理論の意義と限界をなしている。後者の側面を強調するあまりその意義を正当に評価しないエルマンスキー批判は一面的である。反対に、その積極的側面の評価も、理論的偏向の是正という条件のもとであくまで限定つきでなされねばならない。

第2に、エルマンスキーは社会主義的工業化路線のもとで、レーニンの「新しい高度な社会的労働組織」の創出を、社会主義的合理化論として積極的に具体化・展開しようとした。またかれは、1920年代の一連の「合理化」論のなかにおいて、先見的かつ体系的に「合理化」の課題と基本方向をめぐる問題提起

61) 社会主義的合理化の本質的特徴を労働の人格化、社会的労働の主體的役割の積極的評価に求めながら、社会主義社会の発展のなかでのその必然性や条件・プロセスの把握が不十分なものも少なくない。たとえば、暁峻義等監修『労働科学辞典』1949年、168-170ページなどを参照。

をおこなっており、その歴史・理論的位置はけっして低くなかったと思われる。とはいえ当時は、それがもつ理論的偏向のため否定的な評価しか与えられず、かれの積極的な問題提起もとり入れられないままその他の「合理化」論の諸潮流そのものもより一層大きな偏倚をこうむっていくのである。

第3に、このようなエルマンスキー「合理化」論は、現代社会主義企業管理における「合理化」問題の考察にとっても積極面と消極面の両面においてとらえられ、両者は一体となって“効率——人格——民主主義”という視角と“経済——技術・労働・管理”という方法論的枠組みの重要性と意義を示している。

しかしながら本稿でのエルマンスキー理論の考察は、いまだその主要な理論的特徴・傾向の抽出と評価にとどまっており、理論的・歴史的背景と制約の一層深い検討をふまえた全面的なものとはいえない。またそれは、「現代社会主義的合理化」の課題・方法との関連、とりわけ共通性と差異性の統一的把握にもとづいて体系的に展開されたものでもない。これら諸点の解明と、「現代社会主義的合理化」像、とりわけ企業管理制度・組織についての積極的展開は今後の課題である。

(1979年7月 脱稿)